20 Year Anniversary

TOP Collection: Scrolling Through Heisei Part 3

Synchronicity

Sep. 23—Nov. 26, 2017

The Tokyo Photographic Art Museum is pleased to present the exhibition “TOP Collection: Scrolling Through Heisei.” Over the years, the museum has held many exhibitions that introduce the permanent collection through various themes. “TOP Collection: Scrolling Through Heisei” is a year-long exhibition in which a single theme is carried through three parts in series. The theme of this year’s series—the first since the museum re-opened—is “Heisei.” It is now ten years since this museum held the well-received permanent collection exhibition “SHOWA: Photography 1945-1989,” and as the Showa era recedes into the distance, we already find ourselves more than a quarter-century into the current Heisei era. Reflecting on the span of the 1990s, 2000s, and 2010s, we might ask ourselves how artists related to their age and their society, and what forms their works took. Looking at photography through the theme of Heisei, is it possible to find something “Heisei-like”?

Perhaps the values, modes of thought and consciousness specific to this era can be brought into relief by scrolling through it, in the way that we would look at a screen, or indeed at a long scroll painting. Looking through the expression of contemporary Japanese artists can bring to light the social and cultural situation in the background of this work. This exhibition introduces contemporary Japanese photographic works selected from among the more than 34,000 items in the museum’s collection.

Closed ：Monday (if Monday is a national holiday or a substitute holiday, it is the next day)
Admission：Adults ￥500／College Students ￥400／High School and Junior High School Students, Over 65 ￥250
Organized by Tokyo Metropolitan Government / Tokyo Photographic Art Museum
Sponsored by Toppan Printing Co., Ltd.

Press contacts:
Kushiro Akiko, Hirasawa Ayano, Maehara Takako
Press Section, Tokyo Photographic Art Museum
Yebisu Garden Place, 1-13-3 Mita Meguro-ku Tokyo 153-0062
Email: press-info@topmuseum.jp

TOP MUSEUM

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Yebisu Garden Place, 1-13-3 Mita Meguro-ku Tokyo 153-0062
TEL 03-3280-0099　FAX 03-3280-0033
www.topmuseum.jp

総合開館 20 周年記念　TOP コレクション

シンクロニシティ―平成をスクロールする　秋期

TOP Collection: Scrolling Through Heisei Part 3　Synchronicity

2017 年 9 月 23 日（土・祝）― 11 月 26 日（日）

展覧会概要

TOP コレクションは、毎年一つの共通テーマで、三期にわたって東京都写真美術館のコレクションを紹介する展覧会シリーズです。リニューアル・オープン後最初となるシリーズのテーマは「平成」。秋期は「シンクロニシティ」をキーワードに、私たちの生きている場所、この時代とその表現を見ていきます。

「シンクロニシティ」とは、同時に起こるばらばらな物事が一致したり、共通したりする現象を言います。本展は多様な表現傾向をもった平成の作家たちが伝えるそれぞれのリアリティと、その響き合いに焦点を当てます。

モダニズムという「大きな物語」やマス・コミュニケーションの力が減退するにつれて、私たちが「現実」と呼んでいるこの世界の在りようとそれをめぐるイメージは変容してきました。平成の時代の写真作品は、「現実」のあいまいさや多義性を様々な視点から、小さな「現実」や小さな「物語」として描き出してきたと言えるでしょう。90 年代以降、四半世紀を超える時の流れの中で、作家たちはどのように、この不確かな時代と関わり、それぞれのもつ世界観を作品にしてきたのでしょうか。34,000 点を超える収蔵作品から現代日本の写真作品を厳選してご紹介します。

左：原美樹子《Untitled》〈発言の周縁〉より　2004（平成 16）年　発色現像方式印画

右：大森克己〈サルサ・ガムテープ〉より　1998（平成 9）年 発色現像方式印画

平成をスクロールする

平成の時代は、もうすぐ 30 年を迎えようとしています。写真家たちはどのように時代や社会と関わり、作品を形にしてきたのでしょうか。あたかもひとつの長い絵巻や液晶画面を流して見るように、時代をスクロールすることで、この時代に特有の価値観や意識、思想の変遷が浮き彫りにされてくるのではないでしょうか。30 年前、「昭和レトロ」という言葉もまだ無い頃、「昭和的なもの」とは何なのかその当時は誰にもわかりませんでした。それと同じく、「平成的なもの」がどのようなものなのか、この時代の中にいる私たちには、まだそのイメージが明確になってはいません。いまここにある当たり前の「現実」を対象化することは難しいものです。30 年後の未来、「平成はこんな感じだったね」と多くの人たちが語りあう時、人々はどんなイメージを思い描くのでしょうか。本展でご覧いただく写真作品たちは、そんな未来の人々が「平成」をイメージするための記憶のデータベースとなるかもしれません。

シンクロニシティ

本展で紹介する作品群から共通して見えてくるものは、平成期に培われた時代精神といえるものでしょう。これらの作品からは、透明感や明るさの重視、人工的な過剰さ、自らの身辺世界への肯定といった現代作品の特徴的な美意識や世界観も見て取ることができます。さらに、いくつかの作品の中には、曖昧さ、空虚、速度の遅さ、老い、古さ、反都会的なもの、通俗的なものといった、かつてはネガティヴな意味に捉えられてきたものを、ポジティブな価値に転換する力を秘めているものもあります。異なる考え方を排除する不寛容さや、人々の孤立、分断という時代状況を越えて、この時代が次の時代へと引き継いでいくべきプラスのエネルギーを、これらの作品たちから感じ取り、読み取って、「平成の時代らしさ」とは何かを考えます。「世界」と「私」との関係性をめぐる、複数の小さな物語によるシークエンス、それぞれの欠片が呼吸やリズムを合わせるようにしてつながりあうこと、多様な価値の共生こそが、「シンクロニシティ」をテーマとするこの展覧会の意図するものです。

［出品作家］17 名(予定)
朝海陽子、田村彰英、土田ヒロミ、金村修、都築響一、米田知子、野口里佳、浜田涼、川内倫子、志賀理江子、大森克己、新井卓、澤田知子、春木麻衣子、鷹野隆大、北野謙、蜷川実花

［出品点数］
写真作品 137 点(予定)　すべて東京都写真美術館蔵

主な出品作品

原美樹子（1967 –）

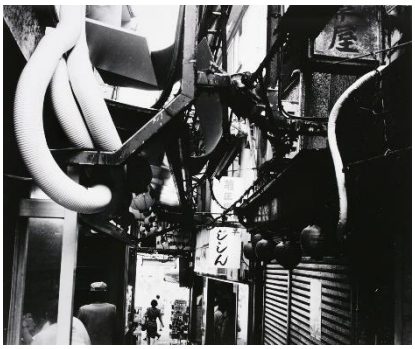
出品 10 点、初出品

原実樹子はクラシックカメラの「イコンタ」を用いて、目の前の光景をスナップショットの手法で捉えています。作家によれば、このカメラを愛用する理由は、撮影者の存在を主張しないこと、音が静かであることだと言います。ピントは目測なので適当に合わせ、ファインダーをのぞかないという撮影スタイルによって、作家は通りすがりの人物や出会った物事を静かにすくいあげます。カメラを意識することなく、たたずみ移動する人々や、小さな身の回りの出来事を捉えた写真は、作家が関心を寄せる「感情、言葉がわき上がってくる一歩手前」の光景の連なりであるとも言えます。何事も起こらない無為な時間の流れの中に、何か特別な輝きが感じられる原の写真には、作家独特の、対象との間の微妙なスタンス、世界との関わり方を反映しています。

原美樹子《Untitled》〈Is As Is〉より　1996（平成 8）年　発色現像方式印画

金村修（1964 – ）

出品 18 点、初出品



金村修はモノクロームで都市の表層を捉えた写真を膨大に撮り続け、発表しています。写真は機械的に写されたかのようで、作家の意図や関心のありかも分からないまま、見る人はただ目の前にある雑然とした都市のイメージの群れと向かい合うことになります。「写真家の終わりはつねに劇的なエンドマークがつけられるのではなくいつも尻切れトンボに終わってしまう。その尻切れトンボを肯定すること。写真は写真で、ただ写真から写真へと続いていく。」（写真集『I CAN TELL』より）作家の言葉からは作品への安易な意味づけを拒む姿勢がうかがえます。1989 年、ちょうど平成元年に写真を撮り始めたという作家にとって、看板、電線、自転車、解体中の建物などの物質や構造こそが、目の前に存在する「現実」なのです。

金村修　《Untitled》〈Clashlanding in Tokyo's Dream〉より　1991 (平成 3) 年
ゼラチン・シルバー・プリント

川内倫子（1972 – ）

このシリーズは、作家のデビュー作で自身の身辺世界で起こる万物の移りゆく様をとらえてます。タイトルの「うたたね」は半分眠り、半分起きている状態、意識と無意識の中間状態を指し、作家の作品世界を端的に表しています。川内倫子の作品は、光のきらめき、明るく透明感のある色彩を特徴としており、複数のイメージを連ねていくことで、詩的なイメージの広がりを生み出します。スクエアのフォーマットで身の回りの光景を鮮やかに切り取るそのスタイルは、多くのファンを生み出しました。〈ある箱のなか〉は、撮影したフィルムのコンタクトシート 20 枚をひとつの画面に再構成した作品。意図的に構成された写真集の場合と異なり、混然としたイメージは作家の無意識を反映しています。

川内倫子　〈うたたね〉より　2001(平成 13)年　発色現像方式印画

野口里佳　(1971－)

出品 8 点、初出品

野口里佳は自身の言葉で言う「新しい地球の見方」や「宇宙から降り立った人間が最初に見た風景」、あるいは「月面」を求めて、強く興味をもった被写体や場所を探求します。〈潜る人〉や〈フジヤマ〉といったシリーズでは、水中や高山を行く人物たちのドキュメンタリーが、作家の想像力の働きによって日常とは別の次元のビジョンに変換されます。出品作品は「マラブ」（アフリカハゲコウ）というコウノトリの一種を被写体としています。ほとんど飛ばない鳥という謎めいた存在に触発され、その姿をピンホールカメラで撮影したこのシリーズは、人間の尺度とは異なる時間の流れを感じさせるとともに、早さや便利さ、変化を追い求める時代の「進歩」に対して、針穴と暗箱で光を集める行為の遅さと不便さ、そしてデジタル写真に対するアナログ・プロセスをも象徴しています。

野口里佳　《Marabu #2》 2005（平成 17）年　発色現像方式印画

米田知子（1965－）

米田知子は歴史と記憶を題材として欧州、アジア、日本をテーマとした作品を発表しています。この作品は東日本大震災を契機として、社会・国家の姿を見た時に感じる「我々は今まで見えない“権威“へ屈していたのではないかという疑問」を動機としています。作家は、探し求めるものが巧みに不可視化されていることを認識しながら、終戦記念日の靖国神社、平和記念日の広島、福島・飯舘村の避難地域といった日本の近代化と戦争の歴史にとって象徴的な場所をめぐり、「我々の存在の意味」をとらえようとしています。

米田知子　《平和記念日・広島》〈積雲〉より 2011（平成 23）年　発色現像方式印画

大森克己（1963－）

出品 19 点、初出品

この作品はロックバンド「サルサ・ガムテープ」をカバーしたドキュメンタリーです。このバンドは 1994（平成 6）年、神奈川県秦野市にある知的障害者施設「秦野精華園」のメンバーによって結成されました。大森克己は 96（平成 8）年からバンドの練習やライブに同行して彼らを撮影し、98（平成 10）年に写真集『サルサ・ガムテープ』にまとめました。大森は撮影日記にこう記しています。「中心がない。自由なのか不自由なのか？くずれそうでくずれない。Punk。何かをのど元につきつけられるパワー。確かに存在する不思議な一体感」。バンドとの交流から生まれたこのシリーズには、共感的な視線とともに、後ろに退いた視点からその場全体を客観的に捉えるショットも多く含まれ、対象との距離感は複雑に変化していきます。作家はこの作品で既成概念に囚われない写真のあり方や、人との関わり方を模索しています。

大森克己　〈サルサ・ガムテープ〉より　1997（平成 9）年　発色現像方式印画

新井卓（1978－）

出品 2 点、初出品

新井卓は写真術が発明された当時の技法であるダゲレオタイプ（銀板写真）を独自に習得し、この技法を用いた写真作品を発表しています。この作品は 2011（平成 23）年から翌 12（平成 24）年にかけて、福島とその周辺、さらに東京や作家自身の生活を見つめながら撮影されました。福島と東京との「現実」の乖離に疑問を抱きつつ、また広島や水俣、沖縄の歴史を踏まえつつ、作家は「私たちの生を、あるできごとの事後として分断することなく何が可能なのか」を考えようとします。古典技法によって捉えられた風景や人々のイメージは、遠い過去の出来事のようでもあり、また現在を遠い未来から見るようでもあります。

新井卓 《2011 年 7 月 25 日、飯舘村飯樋》〈Here and There－明日の島〉より
2011（平成 23）年　ダゲレオタイプ

蜷川実花（1972－）

出品 2 点、初出品

蜷川実花はモデルやアイドルといった人物や、花、金魚といった静物を、原色にあふれたポップな色彩感によって写し出し、独自の幻想世界を造り出します。人工着色された花々の輝きは一瞬のものだといいます。作家は生の絶頂と退廃の瞬間を花に託して描き出します。そのイメージはこの時代の象徴としても見ることができるのではないでしょうか。この作品はインクジェット・プリントのパネル上に、花の小品が構成されて、壁面全体が一つの作品となるインスタレーション性をもっています。

蜷川実花《flowers》より 2015（平成 27）年 インクジェット・プリント、発色現像方式

このリリースに掲載されている図版（参考図版を除く）をデータにてご用意しております。広報担当までお問い合わせください。

掲載点数が 1 点の場合は、展覧会メインイメージとして、本リリース 1 ページ目の、
原美樹子《Untitled》〈発語の周縁〉より　2004（平成 16）年　発色現像方式印画　をご提供させていただきます。

※ご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
※図版のトリミング、文字カブセはできません。

関連事業

学芸員によるギャラリートーク

会期中の第 1・第 3 金曜日 16:00 より担当学芸員による展示解説を行います。本展チケット（当日消印）をご持参のうえ、3 階展示室入り口にお集まりください。

じっくり見たり、つくったりしよう！

出品作品に写っているものについて参加者全員で対話をしながらじっくり鑑賞した後、簡単な写真制作を行います。＊作品解説ではありません。

日　時　2017 年 10 月 22 日（日）、11 月 19 日（日）いずれも 10:30－13:00
対　象　小学生とその保護者（2 人 1 組）
定　員　各日 10 組　事前申込制、先着順。
参加費　800 円（別途本展観覧チケットが必要です）

視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ

障害の有無にかかわらず、多様な背景を持つ人が集まり、言葉を交わしながら一緒に美術を鑑賞するワークショップです。

日　時　2017 年 11 月 3 日（金・祝）10:30-12:30
対　象　どなたでもご参加いただけます。
定　員　14 名　事前申込制、先着順。
参加費　500 円（別途、本展チケットが必要です）
※申込方法など詳細は決まり次第、当館ホームページでお知らせいたします。

また来たくなる！「TOP スタンプラリー」

TOP コレクション「平成をスクロールする」展では、春期、夏期、秋期の 3 つのシーズンをとおして、 TOP オリジナルグッズがもらえるスタンプラリーを開催中です。 3 つの展覧会を観覧して 2 つ以上スタンプを集めると、 すてきなオリジナルグッズがもらえます。
※ スタンプカード配布期間は 9 月 18 日(月・祝)までとなります。

展覧会図録

『TOP コレクション 平成をスクロールする』

春期、夏期、秋期を含む TOP コレクション展より、代表的な出品作品と担当学芸員のテキストを掲載。
編集・発行：東京都写真美術館　A4 変形　160 ページ　1,500 円（税込）

開催概要

主　催　　東京都 東京都写真美術館
会　場　　東京都写真美術館 3 階展示室
　　東京都目黒区三田 1-13-3　恵比寿ガーデンプレイス内
　　Tel　03-3280-0099　URL　http://topmuseum.jp
開館時間　10:00～18:00（木・金は 20:00 まで）
　　※入館は閉館時間の 30 分前まで
休館日　　毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は開館、翌平日が休館）
観覧料　　一般 500(400)円／学生 400(320)円／中高生・65 歳以上 250(200)円
※（　）は 20 名以上の団体料金　※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料
※第 3 水曜日は 65 歳以上無料　※10 月 1 日(日・都民の日)は入場無料

お問い合わせ先

総合開館 20 周年記念 TOP コレクション「シンクロニシティ―平成をスクロールする 秋期」
〒153-0062　東京都目黒区三田 1-13-3　恵比寿ガーデンプレイス内　東京都写真美術館
Tel　03-3280-0034　Fax 03-3280-0033　http://topmuseum.jp
展覧会担当　石田哲朗　t.ishida@topmuseum.jp
広 報 担 当　久代明子、平澤綾乃、前原貴子 press-info@topmuseum.jp